

『セバスティアン・カステリョ 宗教寛容のためのたたかい』

ハンス・B・グッギスベルク著 出村彰訳 新教出版社 二〇〇六年

芦名定道

本書は、カステリョをはじめとした宗教改革期の宗教寛容思想研究で世界的に著名なグッギスベルク（1930-1996）の研究の集大成と言える大著の邦訳である。訳者の出村彰氏は『カステリョ』（清水書院）を執筆するなど、宗教改革研究の第一人者であり、本書は翻訳としてきわめて高い水準を持ち、安心して読みすすめることができる。

カステリョは、『聖対話篇』（聖書を題材とした古典ラテン語読本）や聖書翻訳（ラテン語訳とフランス語訳）といった業績を残したプロテスタント人文主義者であり、セルヴェトゥスが異端のかどによりジュネーブにおいて処刑された（一五五三年一月二七日）ことを端緒として開始されたカルヴァンやベーズとの激しい論争との関連で名前が知られる他は、その思想の実質についてはいわば長い間忘れられた存在であった（一九世紀半ばの再発見）。その寛容思想の決定的な意義にもかかわらず、訳者あとがきで述べられるように、日本ではほとんど無名な人物と言わねばならない。

このようにカステリョについてはわずかな歴史的記録が残っているに過ぎないという制約の中で、グッギスベルクが本書で採用する視座は、歴史学者としてのそれであり、「醒めた目で、いっさいの理想化から自由に」、カステリョの伝記的事実を再構成し、著作の読解を行っている。本書は、全体の三分の二以上を占める第一章「出自・青年時代・教育」から第九章「戦い（晩年）」までの部分において、カステリョの生涯が辿られるが、二五〇頁あまりを一気に読み通させるだけの魅力的な叙述となっている。

書評者としてとくに指摘したいのは、次の点である。まず、本書ではスイス諸都市を中心とした宗教改革の動的な動きがカステリョを中心に鮮やかに描かれており、単なる学説史を超えて、宗教改革が歴史的出来事として何であったのかを知ることができる。とくに、カルヴァンとカステリョとの対立が、異端者に自由を与えることが教会の存立を脅かすときに国家はそれを黙認してはならないという改革者の立場と、そこに信教の自由の抑圧を見、「人間を殺しても、教理を弁証したことにはならず、単純に人殺しにすぎない」と批判する人文主義者の立場との間にあるとの指摘は、説得的である。

次に、本書において『異端は迫害されるべきか』『異端非処罰論』などの緻密な分析によって示されるカステリョの宗教寛容論は、現代の読者が宗教的寛容について考える上で参照すべき多くの洞察を含んでいる。たとえば、異端者とは単なる教会の攪乱者ではなく、探究者、疑惑者という面を有しており、寛容に処すべきであること、教義は重要ではあるが、それは相対的な重要さであって、強制されるべきではないこと、誰が異端者であるか判断できるのは神のみであって、何びとも神の判決を先取りすべきではないこと。

さらに本書は、カステリョの寛容論がセバスティアン・フランクの影響を受けたものであり、またその交流範囲が、スイス諸都市、ドイツ、フランス、オランダはもちろん、東はポーランド（反三位一体論のポーランド兄弟生活団）やハンガリー、西はスペインにまで及んでいることを描き出している。一六世紀のこうした寛容思想のネットワークは、一七世紀になると、ロックなどの寛容論を生み出すことになる。

宗教的寛容は、宗教的多元性の状況下において生きる現代人にとって最も重要な問いとなっている。教派的多元性のもとで展開されたカステリョの寛容論はそのまま現代の宗教的

多元性の状況に適用できるわけではないが、しかし、カステリョから学ぶべきことは少なくない。現代世界においてキリスト教の直面する問題を真剣に考える読者にとって、本書は大きな手がかりとなるであろう。